

# 孫中山と中国留日学生

## — 弘文学院を通して —

高 橋 強

### 1. 序

創価大学の目指す「創価教育学」の提唱者は、創価学会（その前身は創価教育学会）初代会長の牧口常三郎である。牧口が20世紀の初め、中国留日学生の教育に携わっていたことは、あまり知られていない。牧口は1904年（1903年の説もある）から1909年にかけて、東京にあった弘文学院に奉職していた。

弘文学院は、1902年に嘉納治五郎によって創立された中国留日学生の為の学校であった（1903年から宏文学院となったが本稿では弘文を使用）。19世紀末、清国高官の張之洞は人材育成の急務を感じ、『勸学篇』（1898年）を著し日本留学を促進した。日本は中国から近く、西洋の学問が学べ、かつ近代化が吸収できるからである。張は日本政府に、日本における中国人留学生の教育を要請した。嘉納は当時、東京高等師範学校の校長を務めていたが、政府からの要請を受けて中国留日学生の学校を創立した。嘉納はまた講道館柔道の創始者でもある。

牧口は1903年に出版した『人生地理学』で、世に知られるところとなった。出版するや否や多くの新聞、雑誌が取り上げ、それが嘉納の目に止まり、地理学講師として弘文学院への奉職となったものと思われる。嘉納は、講師の採用については大変力を入れ、多くの著名な学者と、新進気鋭の学者を揃えた。前者には、教育学の波多野貞之助、理科教授法の棚橋源太郎等があげられ、後者には、日本語教育の江口辰太郎、松本亀次郎等があげられる。松

本は後日、東亜高等予備学校を創立（1913年）し、日本に留学で来た周恩来にも教鞭をとっている。松本も『佐賀県方言辞典』出版が、弘文学院奉職の切っ掛けになった。

弘文学院は、官費あるいは私費を問わず学生を受け入れ、3年制の普通科以外に、1年、8ヶ月、6ヶ月の速成科の師範、警務、理化、音楽等の学科を設けていた。中国留日学生の学校の中では、その創立は一番古く、在学した学生の数も最も多かったので、名前の知れた学校であった。1909年に閉校するまで、実に約7千名の学生が同学院で学んだ。

弘文学院の在籍者については、蔭山雅博氏により既に名簿が作成されている。<sup>(1)</sup>同名簿のその後の職歴を整理すると、多くの人材を育てている。例えば大学関係者という視点で見ると、9名の学長、范源廉（北京師範大学）、李書城（北京陸軍大学）、趙福寿（北京医科大学）、関廣麟（交通大学）、張鎔（上海交通大学）、侯鴻鑑（上海致用大学）、経亨頤（広東大学）、黄際遇（開封中山大学）、胡元倓（湖南大学）、そして34名の大学教授・教員（例えば北京大学14名、北京女子師範大学3名、内1名は魯迅）を輩出している。

同名簿の中には、孫中山と交流があった人物も実に多く見受けられる。例えば、黄興、陳天華、呂志伊、林覚民、李書城、劉揆一、万声揚、李四光、楊度、張繼、朱少穆、張華潤等である。他の資料等を整理すると、戢翼翬、宋教仁、章炳麟、胡漢民、陳可鈞、黄毓英、楊時傑を付け加えることができる。

その他、特に傑出した同学院出身者としては国民党の長老・呉敬恒、中国共産党創始者の一人・陳独秀、民国はじめ教育総長に就任した范源廉等がいる。

本論文は、これら弘文学院出身者及び弘文学院を通して、同学院が存在した当時の孫中山と中国留日学生との関係を、再度考察することを目的として

いる。

## 2. 中国留日学生と弘文学院

1896年3月、清国駐日公使裕庚から西園寺公望外相に、清国派遣の留学生を然るべき教育家に依託したい旨の依頼があった。西園寺外相は当時文相を兼任していたので、早速高等師範学校長をしていた嘉納治五郎に依頼した。嘉納はこれを引き受け、神田に1戸屋を借りて学校兼寄宿舍とし、高等師範学校教授の本田増次郎を教務主任とし、学生と起居を共にして教育に当たらせた。彼等が日本における中国留日学生の最初で、唐宝鏐、朱忠光、胡宋瀛、戢翼翬、呂烈煌、呂烈輝、馮閣謨、金維新、劉麟、韓寿南、李清澄、王某、趙某の13名であった。嘉納の名前のない学校は1899年、3年間の教育を終えた。13名の中で卒業したのは、7名であった。<sup>(2)</sup>唐宝鏐、胡宋毓、戢翼翬はさらに東京専門学校（早稲田大学の前身）に進んだ。

1899年10月からは、学校を亦楽書院と命名した。両湖（湖南・湖北）総督張之洞、清国公使李成鐸の請による7名を入れ、留学生は計13名の出発であった。この班は、その後の入学者を加え、普通科第2回卒業生（30名）として1902年12月に卒業した。

留学生の急増に伴い亦楽書院が手狭になり、1902年4月に牛込区に弘文学院を設立した。魯迅は認可されたばかりの同学院に、第1号クラスとして入学している。規則上では入学時期は9月11日、卒業は7月10日であった。当時同学院には、警務科（北京警務学堂からの留学生26名）、速成師範科（湖南省留学生10名）、普通科（礦務鐵路学堂からの留学生6名）の3科があった。<sup>(3)</sup>丁度同じ頃、魯迅は普通科で、黄興、楊度、范源廉は速成師範科で学んだことになる。范は在学中、教授の通訳ばかりでなく、嘉納や教師学生<sup>(4)</sup>の間に立って、意志の疎通に尽力したそうである。同じ年、湖北から万声揚、李書城も入学し速成師範科で学んでいる。1903年になると、劉揆一、陳天

華、朱少穆が、1904年には呂志伊、李四光、宋教仁が入学してくる。

留学生の増加は続き、それに伴い、1903年には大塚校舎、1904年には麴町校舎、真嶋町校舎、猿楽町校舎、巢鴨校舎を設置している。留学生は、寄宿舍に入って生活を共にしながら勉強することを本体とし、当初は同学院内にこれを併置していたが、後には同学院の外にこれを設けて弘文学院外塾と称し、監督・指導の教職員を配して、教育の徹底を期した。外塾も留学生の増加と共に逐次増加された。

当時の舎寮の規定時間は、6時起床、6時半行礼、7時朝食、8時より12時自修、正午昼食、1時から5時授業、6時夕食、5時半から9時入浴、9時半行礼、10時消灯であった。<sup>(5)</sup>

学生数は一定ではないが、最盛期の1906年末では、普通科4班1013名、速成師範科6班372名、湖北省班、速成理化科4班166名、その他5名、計1556名にのぼり、その教育等に当たった教職員数を見ると、学院長1名、教授・講師85名、事務員33名、雇員18名、臨時職員37名、計174名であった。<sup>(6)</sup>当時の中国留日学生数は、約8000名であった。

同学院は当初、普通科、速成師範科、警務科の3つの課程から出発したが、相次いで来日する留学生の多様な要求に応じて、短期の内に特定の技術と知識の修得を目的とする各種速成科を随時開設した。師範教育の一環である理化速成科、理化専修科、速成音楽班、高等理科速成班、地方官吏養成のための速成普通科、技術者養成のための速成工業講習班等があった。留学生の大半はこれら各種速成科に在籍した。<sup>(7)</sup>

劉揆一は速成普通科に、朱少穆は普通科に、呂志伊は速成師範科に、李四光は普通科に、林覚民は普通科（1907年入学）に各々在籍した。

同学院の教育の特色は次の点があげられる。第1は全学生塾舎生活を本体とすることである。1903年に「通学生規則」が定められ、学生の通学が認められるようになったが、それに伴い外塾を設置していった。第2は日本語・

日本文研究に熱心であったということである。日本語担当者は毎月1回日本語会を開き共同研究に取り組んだ。第3は理科教育を重視したことである。中国の道德教育は進んでいたが、自然科学の数学、物理学、化学等は低調であったので、実験を重視した指導が採用された。第4は運動部の設置と運動会の開催である。学生、教職員の健康、体力の向上に留意し、運動を奨励するために、運動部を設け、運動会を春秋2季開催していた。第5は講義録の作製である。留学生は卒業の際、各講師の講義ノートを持ち寄って一つにまとめ印刷し、帰国後、それを使用して教授したりした。しかし往々誤記があったので、この弊害を改めるために、学院として講義録を編集し、これを持参し帰国させることにした。

同学院の教育内容は、特に教職専門教育においては当時日本の師範教育の実際と比べ、質量ともに充実していたと言われる<sup>(8)</sup>。牧口が担当していたのが地理科と言うことなので、ここでは特に歴史地理教育の教育内容を紹介する。同学院で重要視していた教育内容の一つであった。

同学院の歴史地理教育は、地理学及び世界歴史をもって構成された。地理学の学習内容は、天文地理、自然地理、人文地理、アジア州、大洋州、ヨーロッパ州、アフリカ州、北アフリカ州、南アフリカ州各地理がそれである。当時は、官学の自然地理学が中心であったが、人文、社会科学系の地理学も取り入れ、同学院のユニークさがわかる<sup>(9)</sup>。五大州の「動植物の形状と分布」及び「人類の種類、風俗習慣、政事、宗教、教育」を理解させる内容編成をとった。アジア州の学習内容は大日本帝国から始め、次いで韓国、清国、さらにインド、シベリア、中央アジア、南洋諸島へと続いている。

これらの学習内容のうち、弘文学院のもっとも重視したのが清国地理学習であり、これの学習には、全学習時間の5分の1を充てた。その内容をみると、地勢、気候、天然資源、住民、交通、海運、外国貿易をもって編成されており、清国の客観的な地理状況を留学生に理解させることが、この項目の

学習目的であった。<sup>(10)</sup>

牧口の『人生地理学』では、「動植物の形状と分布」は同書第20章植物、第21章動物に、「人類の種類」は第22章人類に、「政事、宗教、教育」は第24章社会の分業生活地論に、「地勢」は第1篇人類の生活処としての地に、「気候」は第19章気候に、「交通、海運、外国貿易」は第27章産業地論に各々対応させていた。同書には第28章国家地論、第30章生存競争地論、第31章文明地論等ユニークな内容も含まれている。

当時の同学院留学生は、前述の通り全員寄宿舎生活することを本体とし、学費年額300円で、これによって、学寮費、教育費、食費、衣服費、柴炭燈油費、小遣金費等を一切賄った。月額にして、学寮費約10円、授業料約2円、その他約13円、計月平均25円という経費は、経営側としては大きな困難を伴ったと言われている。

魯迅たちと同室になった沈迪民は、当時の学生生活を回想し、次のように述べている。

「われわれ8人は1つの寝室に一緒に住んだ。弘文の規定では一つの寝室に住むメンバーが、ほかに自修室も与えられ、寝室は2階に、自修室は階下にあった。どれも手狭で、8人が一塊りの生活だった。夏場の寝室では、8人で一枚の日本式蚊帳を共用して、暑さをしのいだのである。

手紙で言及されている“綏之”“強士”“季猷”の3人は、いつも自分たちの自修室に来て、おしゃべりをして、親密なつきあいをしていた。

あの頃、私も魯迅たちも20歳過ぎの青年だった。1日中狭い自修室に集まって、ある時には互いに検討して文字や言葉を推敲し、新しい知識をと渴望し、ある時には気宇雄大な考えを語り合い、目指すところは光復だったし、ある時には濁酒を痛飲して“狂論”を高々と歌い上げた。何れにしろなかなかの元気で、潑刺としていたものだ。当時は中国の半植民地化の勢いがいよいよ強まって、帝国主義の中国略奪競争がいよいよ激しくなり、中国の民族

的危機はいよいよ深刻になり、それらに反対する戦いも勢いよく展開された。」<sup>(11)</sup> 尚、当時の「弘文学院約束学生章程」によると、学生はその本分を守り政治に関する事を論じてはいけなかった。<sup>(12)</sup>

留日学生数の最盛期は1905年、1906年頃であったが、実は1906年頃から清国政府の留学生日本派遣政策に変更が見られ、その数は次第に減少して行くのである。留学生は中等以上の学力を有し、日本語に通ずる必要がある、という留日学生制限の規定が出され、また速成留学生の派遣を停止する内容の通電が発せられた。1907年には既に早くも留学生数は減少し始め、1909年には約5000人となり、1911年に辛亥革命が起こると共にほとんど全部が帰国してしまっ<sup>(13)</sup>た。

清国政府の留学生日本派遣政策の変更の背景には、主として次の原因があげられると言われている。第1は日本留学を終えた帰国者が、中国の教育界に特に初等教育の面で、力を発揮し始めたことである。第2は西洋の教育勢力の中国進出である。この傾向は1905年、日本政府による清国留学生取締問題を機に顕著になっていった。第3は日本人教師の評判である。学識、品性ともに優れ、中国人教育に熱心な教師も少なくなかったが、多数の中には教師としてどうかと思われる人物もいた。<sup>(14)</sup>

以上の点を遠因とするならば、1905年の清国留学生取締問題は直接の切っ掛けとなったと言っても過言ではないように思われる。1905年11月、文部省は清国留学生取締規則を公布した。留日学生が問題にしたのは、第9条の「校外の取締」と第10条の「性行不良」であった。特に性行不良とは墮落学生ともとれるし、革命派の学生ともとれる。日本政府は前者であると釈明している。

留日学生は同規則に反対し、弘文学院から東京各校に同盟休校を企て、文部省が同規則を撤廃しない場合は一斉に帰国すると宣言した。12月中旬から帰国が始まり、約2000名の学生が帰国している。この混乱は1906年1月

中旬まで続き、各学校に約3分の1が復帰・就学して一応落着いたが、従来の留日一辺倒に暗い影を宿すことになった。<sup>(15)</sup>

尚、留日学生の対応は誤解から生じたと評する意見もある。即ち「留学生と、支那に勃興した革命運動との関係は密接なものがあり、(略)日本は革命運動の温床の如くであった。されば清国の官吏は、革命思想を抱く青年が日本に留学することを防止せんとし、駐日公使蔡鈞の如きは、留学生派遣を停止せんことを清廷に密奏したことがあり、此事、極めて留学生を刺激したる時に、文部省の取締規則、発令されたるを以て、留学生は、文部省と公使館との間に連絡あるものと誤解したるが、此の留学生の反対運動の動機であるようである。たとえ留学生の誤解であったにせよ、かかる時機に、かかる取締規則を出したことは得策ではなかった。」<sup>(16)</sup>と。

この清国留学生取締問題は弘文学院にも大きな影響を与え、留日学生の一斉帰国のため麴町、真嶋、猿楽町の3分校を閉鎖ざるを得なかった。1906年には復帰した留学生のために白銀分校を増設している。その後1907年以降の留日学生の減少に伴い、同学院は1909年7月、卒業式兼閉校式を行い閉鎖した。入学者は総計7192名、卒業、修業者は3810名であった。

### 3. 中国留日学生と辛亥革命

中国留日学生が辛亥革命に果たした役割については多くの研究者によって論じられているが、主として次の点があげられる。

- (1) 指導者層や組織の基礎を構築した。 1905年に設立された中国革命同盟会東京本部には、多くの中国留日学生が参加していた。成立大会には甘肅省を除く17省の代表数百人が出席した。1905年から1907年にかけて会員は379名であったが、その内354名が中国留日学生であった。同盟会の庶務科、書記科、評議員、「民報」編集等の重責も担っていた。また会員留学生は、彼等が上海、重慶、香港、煙台、漢口、遼東、河北



等に設立した同盟会支部や、同支部所属の各省分会を機能的に配置し、全国的な同盟会のネットワークを構築した。

- (2) 意識形態の領域で思想的な基礎を構築した。 広範な宣伝活動は、中国留日学生の重要な活動内容であった。集会やデモや講演等を通し、孫中山の革命思想を広めた。特に日本で創刊された80余種類の期刊雑誌や、中国で創刊された数十種類の刊行物は、辛亥革命のために世論の準備を推進した。

孫中山は中国留日学生の国内での宣伝活動を評価した折り次のように述べた。即ち「我が党が曾て日本で組織した同盟会の会員は、1万人余りの学生に過ぎないが、彼等は帰国後、各省に赴き宣伝を行ったので、辛亥年間の武昌蜂起が先頭に立って一声掛けたら、全国に響き、半年も立たない内に、全国を統一する大きな効果を収めた。」と。

- (3) 多くの優秀な指揮官や戦闘員を育てた。 辛亥革命前夜10余年間、一連の反清朝革命闘争は、その大半は中国留日学生により画策され、彼等は直接指揮官や戦闘員として参画し、大きな貢献を成した。

1906年の萍瀏醴蜂起、1907年の黄冈蜂起、七女湖蜂起、鎮南関蜂起、1908年の欽州馬篤山蜂起、河口蜂起、1911年黄花岡蜂起（72名の烈士の内、8名は留日学生で、その内の陳可鈞、林覺民は弘文学院出身者）等、そして中国封建制度の末日を告げた武昌蜂起、それに続く各省での蜂起（雲南蜂起では40名のリーダーの中で31名が留日学生で、その内の呂志伊、黄毓英は弘文学院出身者）や独立運動において、重要な役割を果たした<sup>(17)</sup>。

## 4. 孫中山と中国留日学生

### 4-1. 中国留日学生との接触

- (1) 1898年以降、中国の各省は清朝の規定に基づき、日本に留学生を派遣することを決定し、1899年6月には初めての留学生60余人が東京に着き、

以後公費や私費の留学生が陸続と日本に渡って来た。ある統計によると、1901年は274人、1902年は608人、1904年は2400人、1905年は8000人、1906年は12000人である。<sup>(18)</sup>

当時の中国留日学生にとって孫中山の存在は、「その名前を聞いて久しいが、その人物に会うのは難しい」と言ったものであった。次のようなエピソードもある。呉敬恒が1901年日本に渡った頃、友人が孫中山を紹介しようと言った折り、呉は「1898年以前、孫中山の名前を聞いたことはあるが、彼は海賊として一流の人物にすぎないだけであって、知り合うのは適切ではない。」と答えている。

一方、孫中山もロンドンで監禁事件に遭遇して以降は、身の安全と革命の前途を思慮し、中国人との往来を慎重にしていた。特に日本には清朝の官吏等が多く、慎重にならざるを得なかった。当時、孫中山は少数のエリートで革命活動を進めていた。即ち会党や華僑に頼って推進しており、このことが多くの中国留日学生との関係を妨げる主たる原因となった。

惠州蜂起に失敗した孫中山は、1900年11月19日に横浜に着き、1903年まで日本に滞在した。孫中山が最初に知り合った中国留日学生は広東からの馮自由（馮鏡如の子息）や王寵惠（王煜子の子息）であった。その後広東からの留日学生、蘇曼殊、鄭貫一、李自重等が、しばしば孫中山の住居を訪ねるようになった。1900年から1901年春にかけて、広東からの留日学生が増え、孫中山の横浜の寓居で広東独立協会設立（1901年春設立）について討論するようになった。その背景には、当時フランスが広東をその勢力範囲に収めたことがあった。

1901年6月、孫中山は秦力山、沈翔雲、戢翼翬等が「国民報」を創刊するのを援助している。<sup>(19)</sup> 戢は1896年に中国から最初に官費留学生として派遣されて来た13人の一人で、弘文学院の前身である嘉納の私塾で学んだ。

こうした広東からの留日学生の他に、湖北からの呉禄貞もいた。呉は宮崎

滔天の紹介で孫中山を知ることになった。その後、呉は伝慈祥、鈕永建、沈翔雲、戢翼翬等を孫中山に紹介している<sup>(20)</sup>。

1902年春、「国民報」の編集者の秦力山と章炳麟が横浜に孫中山を訪ね、土地・税制等の改革問題を討議し、共に「均田法」を制定しようとした。これを契機に、章と秦は4月26日東京で開催される「支那亡国二百四十二年紀年会」に孫中山を招き、孫中山は横浜の華僑と共に留学生のこの紀年会に出席した。同紀年会は、清国の駐日公使の要求により日本の警察当局により禁止された為、孫中山と留日学生は別の形式で実施された。しかしこの事は、孫中山と中国留日学生を結ぶ大きな切っ掛けとなった<sup>(21)</sup>。

1903年1月29日、東京で留日学生の新年会が挙行されたが、留日学生の馬君武と劉成禺が駐日公使を前に、公然と清朝を打倒し救国すべきであると演説をした。この時の演説内容は事前に孫中山から教示を受けていたと言われる。

1903年4月、東京の留日学生はロシア侵略排撃の拒俄運動を展開した。留日学生の鈕永建、藍天蔚、黄興らをリーダーとし、4月29日東京の錦輝館で500余人が参加した集会を開催し、ロシアの中国侵略を糾弾し、その後拒俄義勇隊を組織し、軍事訓練を始めた。孫中山がこの運動にかかわったかどうかは不明であるが、留日学生の軍事学を学ぶ希望に応じ、8月、東京青山練兵場の付近に青山軍事学校を設置した。

1903年の8月から9月にかけては、程家樞、馬君武、劉成禺、胡毅生、鄭憲成、楊度、李書城、朱少穆等の各省留日学生有志数十名が孫中山を訪ねている<sup>(22)</sup>。楊度、李書城、朱少穆も弘文学院に籍を置いたことがある。李書城の回顧によると1902年梁啓超が「新民叢報」を創刊し立憲君主を主張した頃は、「留学生で梁啓超に迎合する者少なくなく、弘文学院学生でも多くが梁啓超を崇拜していた。」とあり、その変化を見ることができる<sup>(23)</sup>。

拒俄運動後、孫中山を訪ねる留日学生が後を絶たなくなったが、その背景

には宮崎の「三十三年之夢」との関係も見逃せない。「三十三年之夢」は1900年の惠州蜂起までの孫中山の革命運動に対する援助を中心とする宮崎の自伝的作品で、1902年1月から「二六新報」という新聞に連載されていた（発行部数15万部）。

東京の留日学生は拒俄運動を通し、「湖北学生界」、「遊学訳編」、「江蘇」、「浙江潮」、「新湖南」等、民族主義を呼び掛ける雑誌を多く創刊した。これらの雑誌では孫中山に関する報道も紹介していた。このような状況は孫中山を勇気付けたと言われている。孫中山は9月21日には、留日学生の雑誌「江蘇」第6期に「支那保全分割論」を発表し、留日学生の廖仲愷、何香凝等と革命救国の方法を討論した。<sup>(24)</sup>

孫中山は同年9月26日に横浜からホノルルに向かうのであるが、この3年間の日本滞在は、孫中山と留日学生との相互の理解を深めるのに大きく役立った。しかし、留日学生が孫中山を革命のリーダーとして仰ぐのは後のことである。当時の留日学生はまだ革命を実践する段階ではなかったので、孫中山は革命の先駆者ではあったが、彼等のリーダーではなかった。<sup>(25)</sup>

（2）孫中山が日本を離れる前後、日本の中国留学生教育機関において、1、2年の速成科を卒業した中国留日学生の一部も帰国した。彼等の多くは、日本で身に付けた革命思想を宣伝しながら、中国国内で清朝打倒の準備を開始した。

その中の一人に黄興がいた。黄興は1902年、日本への留学生に選ばれて、弘文学院の速成師範科に入学した。1903年4月、拒俄義勇隊に参加し、軍国民教育会の帰国して革命運動を行う、という方針にのっとって、帰国して「華興会」を組織するのである。黄興は湖南の明德学堂の教員となり、革命思想の宣伝につとめた。同年6月、武昌の文普通学堂で排満革命の演説を行うが、当時、宋教仁は同学堂の学生として演説を聞いている。黄興は「革命軍」「猛回頭」等のパンフレットを学生、軍隊、民間に配布しながら、同年

11月に長沙で劉揆一、陳天華、宋教仁等と共に革命団体「華興会」を組織した。劉も陳も1903年に弘文学院に学んでいる。1904年に長沙蜂起を計画したが、未然に発覚し、陳天華等と共に再び日本に渡るのである<sup>(26)</sup>。

東京に渡った黄興は、雑誌「二十世紀之支那」の発行を宋教仁や陳天華らと計画した。またこの「二十世紀之支那」社は、それまでの留学生の出した雑誌が出身省別のものであったのに対して、湖南省出身者を中心とした各省出身者の寄り合いであり、統一的な革命組織の「中国革命同盟会」の母体の一つになった<sup>(27)</sup>。

#### 4-2. 中国留日学生と中国革命同盟会

(1) 孫中山は1905年7月19日、約2年ぶりに日本に戻り横浜に到着した。この時東京の中国留日学生の間には、革命的風潮が溢れていた。中国留日学生数は、孫中山が日本を離れた1903年の1300名から8000名に増加し、民族意識に目覚めた学生の中には衰微腐敗した清朝を打倒すべきという革命思想を抱く者が多くなった<sup>(28)</sup>。

当時、華興会や光復会等種々の革命団体が存在したが、各々地域性が強く、かつ分散的であった。この状況を、孫中山の来日を機に統一に導いた人物がいた。それは宮崎滔天であった。7月19日日本に到着した孫中山は、宮崎に「留学生中に共に事をなすべき有為の人物があれば、それらの士を紹介してくれ」と頼んだ。7月下旬、宮崎は孫中山を案内して牛込神楽坂に黄興を訪ねた。宮崎と黄興は、黄興が日本に留学した1902年冬あるいは1903年春東京で知り合っている。孫中山は黄興、張継、宮崎、宋教仁等と革命派の連合問題を検討し始めた。7月28日宮崎は孫中山を案内して「二十世紀之支那」社を訪ね、宋教仁、陳天華等を紹介した。孫中山は彼等に連合の必要性を説明した。

7月29日、黄興、宋教仁は神楽坂の黄興の寓居において、華興会の会員

等と共に孫中山の興中会と連合することを協議した。30日、赤坂区檜町の内田良平等の黒竜会で、中国革命同盟会成立準備会が開かれ、孫中山、黄興、張繼、陳天華、宋教仁、馮自由等、興中会、華興会、光復会等の会員、中国各地からの留学生等を含む70余名が出席した。

この時、弘文学院出身の呂志伊、張華潤も5名の雲南代表の一員として出席している<sup>(29)</sup>。更に当時16歳であった李四光も出席している。李は弘文学院に入学（1904年12月）して来た宋教仁により革命思想に触れた。李の回顧によると、当日有名な孫中山に会えるということで感激して参加し、孫中山に頭を撫でられながら「君のように若くして革命に参加できることは大変よろしい。勉学に専心し国の為に役立ってほしい。」と激励されたという<sup>(30)</sup>。その他、弘文学院出身としては李書城、朱少穆も出席した。

8月13日、黄興、宋教仁、張繼等が中心となって麴町区富士見楼で東京中国留日学生の孫中山歓迎会が開催された。大会には1000人以上の留学生が出席し、空前の盛況であった。孫中山は民族主義を中心とした演説を行い、青年留学生等の共鳴心を呼び起こした。このことにより青年留学生等に対する孫中山のリーダー的地位が確立し始めた。

8月20日、中国同盟会の成立大会が赤坂霊南坂の坂本金弥宅で開催され、黄興の提議により孫中山が総理に選出され、黄興が執行部庶務長に推薦された。同執行部には多くの弘文学院出身者が入っている。例えば庶務科には張繼、劉揆一が、書記科には胡漢民が、司法科には宋教仁が各々就いている。加盟者は300余名、その大半が青年留学生であった。成立後3ヶ月にして、中国同盟会に加盟するものは中国留日学生の大半を占めたと言われる<sup>(31)</sup>。

過去の興中会は広東人と華僑が絶対多数であったが、中国同盟会は湖南、湖北、広東省を中心に甘肅省以外の各省の人々が参加して全国的な革命組織になり、その基盤も華僑から青年知識層に拡大され、華僑の財政的支援、青年知識層の宣伝・指導的役割、国内における会党、というこの三者の結合に

より、孫中山の革命運動は新たな段階に発展した。

（２）同盟会成立大会で宋教仁等が編集していた「二十世紀之支那」を同会の機関誌にするよう決定した。その後同雑誌は発展的に解消され、同年10月には「民報」が発刊された。「民報」の編集長章炳麟であるが、章も弘文学院に籍を置いたことがある。<sup>(32)</sup>孫中山はその発刊の辞で、民族主義、民権主義、民生主義の「三民主義」を始めて提唱した。「民報」は中国留日学生や華僑ばかりか、中国国内でも飛ぶように売れ、1年あまりで7版を重ねたと言われる。

この「民報」に論文を載せた人物の中には、一方においては孫中山をはじめとする広東系の人物がいる。その代表的な論客は汪兆銘と胡漢民である。胡の「新民叢報の誤謬を斥ける」は有名である。胡は1902年、官費留学生として黄興と同じ弘文学院に入学した。同盟会に参加し孫中山の秘書となっている。

以上の二人を広東系で孫中山に近い人物とするなら、黄興等の湖南系の人物で「民報」の論客として極立った活躍をした人物は陳天華である。陳は革命を鼓吹するパンフレット「猛回頭」「警世鐘」「獅子吼」の著者で、同盟会の書記を務めたが、清国留学生取締規則事件の折り、大森海岸で投身自殺をし、「絶命書」で同規則と中国人に対する日本世論の侮蔑に強く抗議した。

「民報」は、汪兆銘、胡漢民、宋教仁、陳天華といった新進気鋭の論客をそろえて梁啓超の「新民叢報」を1年のうちに完全に圧倒するのである。<sup>(33)</sup>当時、弘文学院に学んでいた一人の留学生・黄尊三の1905年12月3日の日記を見ると「〈民報〉を見る。（略）革命を鼓吹し、民族主義を提唱す、文字頗佳、説理亦た透る、価値、〈新民叢報〉の上に在り」と評価している。黄は同年6月頃には「新民叢報」を愛読していた。黄は革命運動と学習の両立の問題で悩んでいた一般的な学生である。<sup>(34)</sup>

（３）同盟会の成立は中国留日学生の運動に新しい拍車をかけ、同盟会は

留学生運動を指導した。最初に指導した運動は、清国留学生取締規則反対運動であった。清国政府は特に、私費留学生が同盟会に参加して活動することに神経をとがらせ、私費留学生の取締を日本政府に依頼した。

既に1902年、在日留学生が増えはじめた頃から駐日清国公使館は留学生の革命運動に神経をとがらせていた。支那亡国紀念会を中止させ、私費留学生が陸軍学校に入学することを禁止させ（1902年）、拒俄義勇隊の運動を弾圧し（1903年）、さらに1905年の私費留学生の取締となったのである。

1905年11月、日本の文部省は「清国人を入学せしむる公私立学校に関する規程」を公布した。この中で留学生が特に問題にしたのは、第9条の、留学生を「寄宿舍又は学校の監督に属する下宿等に宿泊せしめ校外の取締をなすべし」というものと、第10条の、留学生のうち「性行不良」で退学になった学生は再び他の学校に入学することができない、としたものである。しかし中でも一番問題にされたのは、第1条の、留学生が日本の学校に入学しようとする時には、入学願書に添えて清国公使館の紹介状が必要である、としたことである。<sup>(35)</sup>

時あたかも、孫中山は10月7日ハノイに赴き、黄興も11月26日香港・桂林方面に赴いていた。同盟会では張継が責任を負っていた。張も弘文学院に籍を置いたことがある。同盟会本部は取締規則反対運動を協議し、宋教仁、胡瑛に中国学生連合会を成立させて、この運動を指導するようにした。連合会は12月1日「学生公稟」という長文の意見書を文部省に提出した。5日には300名の留学生が富士見軒で大会を開き声明書を発表し、清国公使館と交渉しようとしたが、相手にされなかった。

12月8日、弘文学院の留学生が先ずストライキに入り、その後経緯学堂、早稲田大学、大成学校等の留学生が相次いでストに入った。12月中旬には、学校を退学して集団的に帰国する留学生が相次ぎ、その数は2000名に達した。<sup>(36)</sup>



（４）この運動中あるいは運動後に帰国した留学生の中の同盟会員は、中国国内で同盟会分会をつくり、学堂を拠点として革命思想を宣伝し、あるいは会党、新軍の中に潜伏して革命活動を展開した。更にまた、同盟会会員の自発的な革命運動も展開された。

一方、同盟会成立後、孫中山、黄興等は国内と東南アジアの各地に同盟会分会をつくり、革命に必要な準備を始めた。1906年秋・冬、孫中山は東京で黄興、章炳麟等と共に「革命方略」を制定し、革命勃発後に布告すべき「軍政府宣言」「軍政府と各国民軍の関係」「軍隊の編制」「軍人紀律」「対外宣言」等具体的方針と政策を作成した。

この時、孫中山の東京でのもう一つの重要な活動は、1906年12月2日に神田錦輝館で開催された「民報」1周年記念大会であった。空前の盛会で約1万人が参加した。孫中山は、三民主義思想と中国民族の前途そして五権憲法について演説した。「民報」は創刊以来、中国留日学生等の雑誌、「雲南」、「復報」、「豫報」、「洞庭波」等の創刊を援助し、革命の気運を高めた。<sup>(37)</sup>

このような活動は清朝支配に大きな衝撃を与えた。清国政府は東京を根拠地とする孫中山の同盟会の破壊工作に取りかかった。日本政府は清国政府の要求を聞き入れ、1907年3月、孫中山を日本から追放した。3月4日、孫中山は汪兆銘、胡漢民等と共に横浜から香港経由でシンガポールに赴いたのである。孫中山が次に来日するのは1910年6月10日であった。

## 5. 結び

（１）第2章で「中国留日学生と辛亥革命」と題しその特徴を整理したが、弘文学院出身者もそのすべてに関係しており、その一つの典型を示しているようである。例えば同盟会庶務科に黄興、張繼、劉揆一が、書記科には胡漢民が、司法科には宋教仁が各々就いている。また広範な宣伝活動を推進する際に、陳天華の書いた「猛回頭」「警世鐘」「獅子吼」のパンフレットは大き

な影響をもたらした。そして黄興のような極めて優秀な指揮官ばかりでなく各地の蜂起の第一線において、呂志伊、黄毓英のような優秀なリーダーや陳可鈞、林覺民のような烈士もいた。

弘文学院の特徴の一つに、速成科中心の運営があげられる。速成課程は1906年以降廃止されるが、同学院開設1902年以降5年間について見ると、速成科卒業生は93%（1830名）で、その内8割は師範科関係の修了者であった。<sup>(38)</sup>就学期間は1年、8ヶ月、6ヶ月（中には4ヶ月もある）であるが、その出入りは弾力性のある課程のようである。例えば1903年4月に入学した劉揆一、陳天華は同年11月に長沙で黄興と共に華興会を組織している。宋教仁は1904年12月に入学している。

黄興は速成師範科の第1回の卒業生である。師範科修了者（中途者も含めて）の大半が帰国後、学堂等で教職に就いたと思われる。その全てが黄興と同様に、積極的に革命思想の宣伝に務めたとは思えないが、革命のための世論作りに大きな貢献をしたと言っても過言ではない。またこの5年の間には、拒俄運動、同盟会成立、孫中山との大会等での出会い、民報発刊、留学生取締規則事件等、劇的な出来事が多い。日本滞在は短期間であったが、多くの触発を受けて陸続と帰国していったのである。

弘文学院のもう一つの特徴として、湖南・湖北出身者が多いことがあげられる。両湖総督張之洞の請により、嘉納が留学生を受け入れたという背景があった。1902年から1906年までの卒業生全体の41%（湖南206名、湖北603名、計809名）で最大であった。湖南から黄興、楊度、劉揆一、陳天華、宋教仁が、湖北から李書城、万声揚、楊時傑、李四光が入学している。クラス編成は言語の関係から出身省別に行われたので、相互に親密な交流があった。これらのメンバーを中心として、卒業生（中途者も含めて）の多くは湖南・湖北の革命運動に多大な貢献をもたらしたと思われる。

（2）孫中山は1894年興中会成立から約10年間は、華僑や会党を革命の

中心的な力と見なしていた。1905年からは中国革命同盟会を中心に中国留日学生の力を大いに借りながら革命を推進していった。1905年に「民報」を発刊するが、留日学生の新進気鋭の論客で、1年後には梁啓超の「新民叢報」を凌駕している。同年の清国留学生取締規則事件の際には、同盟会のおかげで留日学生は組織立った運動が可能になったと考えられる。1906年に孫中山は「革命方略」を作り上げるが留日学生の果たした役割は極めて大である。留日学生は、このように孫中山と劇的な出会いをした後、質的变化をとげながら減少して行くのである。

孫中山は1900年から1903年まで日本滞在中に、大会の開催や、訪問を受けたり、留学生の雑誌への投稿等を通して、留日学生との接触を開始した。1903年に離日し、再度の来日が同盟会成立に繋がるのであるが、その存在の大であることに驚かされる。当時日本には種々の革命団体があり、各々が独自の運動を展開していた。それを統合する過程で宮崎等の努力もあったが、やはり孫中山という人物が存在しなければ達成は不可能であったであろう。以前もそうであったが、同盟会成立以後、孫中山は更に留日学生の精神的なシンボリック的存在になっていった。革命に対する大情熱が、周囲をそうさせたのであろうか。

（3）牧口は1904年から1909年まで弘文学院で講師を続け、ほぼ同学院の歴史と共に歩んだことになる。地理学の特に人生地理学の講義を通じて多くの留学生と交流を持つことができたのである。嘉納からの信任もあったのであろうか、1905年からは茗溪会（東京高等師範学校同窓会）書記（庶務会計）も務めている。なお弘文学院が閉鎖された翌年の1910年の日付けで、牧口は「東京宏学院講師 牧口常三郎」の肩書きを使ったことがある。残留した留学生に教えていたのであろうか。これは今後の課題としたい。

## 注

- (1) 蔭山雅博「弘文学院における中国人留学生教育について(2)」学習院大学史学会「响沫集5」1986年。
- (2) 老松信一「嘉納次五郎と中国人留学生教育」講道館柔道科学研究紀要第5輯1978年83-89頁。
- (3) 阿部兼也『魯迅の仙台時代』東北大学出版会2000年236頁。
- (4) 横山健堂『嘉納先生伝』講道館1941年192頁、さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版1970年156頁。
- (5) 講道館所蔵文書「記録文書」。
- (6) さねとうけいしゅう『前掲』55-62頁。
- (7) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育の展開」齊藤秋男その他『教育の中の民族』明石書店1988年141頁。
- (8) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育の展開」前掲149頁。
- (9) 源昌久「牧口常三郎と志賀重昂」『牧口常三郎全集第1巻月報5』1983年4頁。
- (10) 蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育の展開」前掲150頁。
- (11) 阿部兼也『前掲』236-237頁。
- (12) 講道館所蔵文書「弘文学院約束学生章程」。
- (13) さねとうけいしゅう『前掲』104頁。
- (14) さねとうけいしゅう『前掲』104頁。
- (15) 老松信一「前掲」90頁。
- (16) 横山健堂『前掲』200頁。
- (17) 張希哲・陳三井『華僑与孫中山先生領導的国民革命學術研討会論文集』国史館1997年499-501頁、李喜所『近代中国的留学生』北京人民出版社1987年191-195頁。
- (18) 李吉奎『孫中山与日本』広東人民出版社1996年171頁。
- (19) 段雲章『孫中山与日本史事編年』広東人民出版社1996年111頁、李吉『前掲』172頁。
- (20) 曾祥進『孫中山先生系列伝記文学3』1994年217-227頁。
- (21) 俞辛焞『孫文の革命運動と日本』六興出版1989年93-103頁。
- (22) 段雲章『前掲』120頁。
- (23) 尚明軒『孫中山的歷程(上)』解放軍文芸出版社1998年276頁。
- (24) 李吉奎『前掲』184頁、尚明軒『前掲』280頁。

- (25) 尚明軒『前掲』280頁。
- (26) 上垣外憲一『日本留学と革命運動』東京大学出版会1982年108-110頁。
- (27) 上垣外憲一『前掲』111-113頁。
- (28) 俞辛焯『前掲』100-103頁。
- (29) 王林忠、向翔「孫中山と雲南辛亥革命」『第3回孫中山と現代中国學術研討会』2000年3頁。
- (30) 陳群『李四光伝』人民出版社1996年11-13頁。
- (31) 上垣外憲一『前掲』111-113頁。
- (32) 横山健堂『前掲』175頁。
- (33) 上垣外憲一『前掲』113-118頁。
- (34) さねとうけいしゅう『前掲』156-157頁。
- (35) 上垣外憲一『前掲』117-128頁。
- (36) 俞辛焯『前掲』110-111頁。
- (37) 李吉奎『前掲』213-215頁。
- (38) 講道館所蔵文書「宏文学院一覧」。